

芥川龍之介集

杉浦非水裝幀

改
造
社
版

昭和三年一月 五日印刷
 昭和三年一月 九日發行

現代日本文學全集 第三十篇

著 者 芥 川 龍 之 介

發 行 者 山 本 美

印 刷 者 杉 山 愛 二



發 兌

東京市麹町區內幸町一丁目三番地
 幸ビ
 ル
 デ
 イ
 シ
 グ
 壹階

改 造 社

電 報 掛 牌
 銀 行 東京
 座 銀座
 五 四一八
 〇 五七四
 四 五三〇
 六 八三二
 番 番 番

「芥川龍之介集」目次

拳頭寫眞 (筆影)	小傳	羅生門	鼻	父	運	手巾	尾形了齋覺之書	銘	芋粥	MEMSURA ZO LI	奉教人の死	るしへる	枯野抄	開化の殺人	袈裟と盛遠	或る日の大石内蔵之助
筆影		七	二	二	一五	二	二七	三〇	三三	三三	四〇	四〇	五七	五七	五七	五七

首が落ちた話	戯作三昧	地獄變	西郷隆盛	蜜柑	沼地	きりしとほろ土人傳	龍	世之助の話	あの頃の自分の事	葱	秋	黒衣聖母	山鳴	舞踏會	南京の基督	鼠小僧次郎吉	秋山圖
八二	八八	一〇四	一二三	一二三	一二三	一二六	一四五	一五三	一五七	一六六	一七四	一八二	一八六	一九三	一九七	二〇五	二二五

將軍軍	六の宮の姫君	トロツコ	お富の貞操	庭	戴の中	母	好色	報恩記	老いたる素戔鳴尊	一塊の土	不思議な島	離	糸女覺之書	子供の病氣	寒さ	あばばば	保吉の手帳から	お時儀	湖南の扇	年末の一日	蜃氣樓
三三	三三	三八	四二	四九	五三	五三	五七	五七	五七	五七	五九	五九	三八	三三	三七	三〇	三五	三四	三四	三五	三五

點鬼簿	玄鶴山房	河童	齒車	或阿呆の一生	西方の人	續西方の人	舊友へ送る手記	尾生の信	東洋の秋	澄江堂雜記(一)	澄江堂雜記(二)	澄江堂雜記(三)	槍ヶ嶽紀行	上海游記	江南游記	長江游記	年譜
三九	三六	三七	四〇	四九	四九	四九	四九	四九	四九	四六	四六	四七	四七	四八	五〇	五〇	五四

芥川龍之介小傳

この全集の計畫に成つた初め、この集の巻頭に、かうした氏の小傳を添へるやうにならうとは、何人がよく豫想し得たらう。これは當然に、他の現在の諸作家の集と同じく、氏のオオトラフの序詞が載るべきであつたのだ。氏の存在は吾等にとつてまだそのやうに親近な感じを抱かすものがある。

芥川龍之介氏は明治二十五年三月一日、東京京橋區入船町に、新原敏三氏の長男として生れた。辰年、辰月、辰日、辰刻の出生たりしに因んで、龍之介と名付けられたのださうである。生後母堂の病弱であつたために、又母方に子供がなかつたために、引き取られて遂に芥川姓を冒すに至つた。養父章道氏は母堂の實兄である。

江戸末期の大通細木香以が、芥川氏母方の大叔父であつた事は、藝術家としての氏を考へる上に、若干の暗示にはなる。併し勿論、それを餘りに重要視し過ぎては、却つて氏を正しく評價すべき妨げとならう。

明治三十一年初めて小學校の門を潜つて、大正五年東京帝國大學の英文科を卒業するまで、

前後十四年の學生生活を通じ、氏は稀に見るの「秀才」として終始した。恐らくはその文藝書に親しんだ最初と見て然るべき徳富蘆花の「自然と人生」を、散び讀んだのが實に尋常小學校の三年の時であつたと傳へられる。以て如何に早熟の才であつたかを窺ひ見るべきであらう。學生時代の最難關たる高等學校の如きも、無試験推薦で、一高に入つたのである。

帝大卒業の時の卒業論文は「ウキリム・モリス研究」であつた。この題目の選擇は凡ゆる點で如何にも芥川氏らしいと云ふ氣がする。

これより前大正三年、諸友人と第三次「新思潮」を刊行し、短篇「老年」を發表した。即ち處女作と言へよう。翌四年には「帝國文學」に「ひよつとことと」羅生門の二作發表。氏自らは「世評未だ一言を加へず」と言つてゐるが、少くとも後者の如き、夙に少數具眼の士の注目を引いてゐたのである。

その同じ四年十二月、夏目漱石の門下に加はつた。蓋し氏の作家的生活に及ぼした漱石の感化は最も著大で、次に鵲外の影響を受けた。

五年、第四次「新思潮」に「鼻」を發表した時の如き、漱石は實に「君がかかる作を十も書いたら、日本は勿論、世界でもユニークな作家の一人と

なるであらう」と云ふ意味の激勵を與へた。大正六年五月創作第一集「羅生門」刊行、十一月第二集「煙草と惡魔」刊行、早くも作家としての確固たる地位を得、八年第三集「傀儡師」が出た頃は、既に偶然たる一方の大家であつた。

その後はただ、フラウベルにも比すべき「藝術的精進」のためなき連續であつた事を語れば足らう。詳細は年表の參照を乞ふ。

それが昭和二年七月二十四日早朝、氏は自ら命を絶つた。それは實に有島武郎氏の死以來の衝擊をただに文壇のみならず、廣く一般社會に與へた。それは確かに意外であつた。

何故に選んだ死であつたらう乎。凡ての自殺の場合と同じくその全的解決は永久に望まれなものの、もしそれ本集に收録された「蘭車」或舊友へ送る手記などを一讀すれば、少くともそのための重要な鍵を握む事が出來よう。

死後現れた多くの批評の中で、特に注目すべきは、ある社會運動家がこれをベトロニウスに比した一語であつた。なるほどベトロニウスも芥川氏も、過ぎ去く階級の最高教養を溶合してゐた意味で、又新しきものの胎動に決して全然盲目ではなかつたが併し今更自分では如何とも出來なかつた點で、似てゐたと言へよう。

羅 生 門

或日の暮方の事である。一人の下人が羅生門の下で雨やみを待つてゐた。

廣い門の下には、この男の外に誰もゐない。誰、所、所丹堂の剥けた、大きな圓柱に、蟋蟀が一匹とまつてゐる。羅生門が朱雀大路にある以上は、この男の外にも、雨やみをする市女笠や搦烏帽子が、もう二三人はありさうなものである。それが、この男の外には誰もゐない。

何故かと云ふと、この二三年、京都には、地震とか辻風とか火事とか饑饉とか云ふ災がつづいて起つた。そこで洛中のさびれ方は一通りではない。舊記によると、佛像や佛具を打碎いて、その丹がついたり、金銀の箔がついたりした木を、路ばたにつみ重ねて、薪の料に賣つてゐたと云ふ事である。洛中がその始末であるから、羅生門の修理などは、元より誰も捨てて顧る者がなかつた。するとその荒れ果てたのをよい事にして、狐狸が棲む。盗人が棲む。とうとうしまひには、引取り手のない死人を、この門へ持つて來て棄てて行くと云ふ習慣さへ出來た。

そこで、日の目が見えなくなると、誰でも氣味を悪るがつて、この門の近所へは足びみをしない事になつてしまつたのである。

その代り又鴉が何處からか、たくさん集つて來た。晝間見ると、その鴉が何羽となく輪を描いて、高い鵝尾のまはりを啼きながら、飛びまはつてゐる。殊に門の上の空が夕焼けであかくなる時には、それが胡麻をまいたやうにはつきり見えた。鴉は、勿論門の上にある死人の肉を、啄みに來るのである。尤も今日は、刻限が迎いせぬか、一羽も見えない。唯、所、所、崩れかかつた、さうしてその崩れ目に長い草のはえた石段の上に、鴉の糞が、點點と白くこびりついてゐるのが見える。下人は七段ある石段の一番上の段に、洗ひざらした紺の襖の尻を据ゑて、右の頬に出來た、大きな面皰を氣にしながら、ぼんやり、雨のふるのを眺めてゐた。

作者はさつき、「下人が雨やみを待つてゐた」と書いた。しかし、下人は雨がやんでも、格別どうしようと思ふ當てはない。ふだんなら、勿論、

主人の家へ歸る可き當である。所がその主人からは、四五日前に暇を出された。前にも書いたやうに、當時京都の町は一通りならず衰微してゐた。今この下人が、永年使はれてゐた主人から、暇を出されたのも、實はこの衰微の小さな餘波に外ならない。だから「下人が雨やみを待つてゐた」と云ふよりも「雨にふりこめられた下人が、行き所がなく、途方にくれてゐた」と云ふ方が、適當である。その上、今日の空模様も少からず、この平安朝の下人の sentimentalism に影響した。申の刻下りからふり出した雨は、未に上るけしきがない。そこで、下人は、何を措いても差當り明日の暮しをどうにかしようとして——云はばどうにもならない事を、どうにかしようとして、とりとめもない考へをたどりながら、さつきから朱雀大路にふる雨の音を、聞くともなく聞いてゐたのである。

雨は、羅生門をつつんで、遠くから、ざあつと云ふ音をあつめて來る。夕闇は次第に空を低くして、見上げると、門の屋根が、斜につき出した薨の先に、重たくうす暗い雲を支へてゐる。

どうにもならない事を、どうにかする爲には、手段を選んでゐる邊はない。選んでゐれば、築土の下か、道ばたの土の上で、饑死をするばかり

である。さうして、この門の上へ持つて来て、犬のやうに棄てられてしまふばかりである。選ばないといふれば——下人の考へは、何ども同じ道を低徊した擧句に、やつとこの局所へ逢着した。しかしこの「すれば」は、何時までたつても、結局「すれば」であつた。下人は、手段を選ばないといふ事を肯定しながらも、この「すれば」のかたをつける爲に、當然、その後に来る可き「盗人になるより外に仕方がない」と云ふ事を、積極的に肯定する丈の勇氣が出ずにゐたのである。

下人は、大きな嘘をして、それから、大儀さうに立上つた。夕冷えのする京都は、もう火桶が欲しい程の寒さである。風は門の柱と柱との間を、夕闇と共に遠慮なく、吹きぬける。丹塗の柱にとまつてゐた蟋蟀も、もうどこかへ行つてしまつた。

下人は、頸をちぢめながら、山吹の汗衫に重ねた、紺の袂の肩を高くして門のまはりを見まはした。雨風の思のない、人目にかかる恨のない一晩樂にねられさうな所があれば、そこでともかくも、夜を明かさうと思つたからである。すると幸、門の上の樓へ上る、幅の廣い、これと丹を塗つた梯子が眼についた。上なら、人が

ゐたにしても、どうせ死人ばかりである。下人はそこで腰にさげた、聖柄の太刀が鞘走らないやうに氣をつけながら、葦草履をはいた足を、その梯子の一番下の段へふみかけた。

それから、何分かの後である。羅生門の樓の上へ出る、幅の廣い梯子の中段に、一人の男が、猫のやうに身をちぢめて息を殺しながら、上の容子を窺つてゐた。樓の上からさす火の光が、かすかに、その男の右の頬をてらしてゐる。短い鬚の中に、赤く腫を持つた面皰のある頬である。下人は、始めから、この上にある者は死人ばかりだと高を括つてゐた。それが、梯子を二三段上つて見ると、上では誰か火をとぼして、しかもその火を其處此處と動かしてゐるらしい。これは、その濁つた、黄いろい光が、隅隅に蜘蛛の巣をかけた天井裏に、揺れながら映つたので、すぐにそれと知れたのである。この雨の夜に、この羅生門の上で、火をともしてゐるからは、どうせ唯の者ではない。

下人は、守宮のやうに足音をぬすんで、やつと急な梯子を、一番上の段まで這ふやうにして上りつめた。さうして體を出来る丈、平にながら、頸を出来る丈、前へ出して、恐る恐る、樓の内を覗いて見た。

みると、樓の内には、噂に聞いた通り、幾つかの死骸が、無造作に棄ててあるが、火の光の及ぶ範圍が、思つたより狭いので、數は幾つともわからぬ。唯、おぼろげながら、知れるのは、その中に裸の死骸と、著物を著た死骸とがあるといふ事である。勿論、中には女も男もまじつてゐるらしい。さうして、その死骸は皆、それが、嘗て生きてゐた人間だと云ふ事實さへ疑はれる程、土を捏ねて造つた人形のやうに、口を開いたり手を延ばしたりして、ごろごろ床の上にころがってゐた。しかも、肩とか胸とかの高くなつてゐる部分に、ぼんやりした火の光をうけて、低くなつてゐる部分の影を一層暗くしながら、永久に啞の如く黙つてゐた。

下人は、それらの死骸の腐爛した臭氣に思はず、鼻を掩つた。しかし、その手は、次の瞬間には、もう鼻を掩ふ事を忘れてゐた。或る強い感情が、すつかりこの男の嗅覺を奪つてしまつたからである。

下人の眼は、その時、はじめて、其死骸の中に蹲つてゐる人間を見た。楸肌色の著物を著た、春の低い、瘦せた、白髪頭の、猿のやうな老婆である。その老婆は、右の手に火をともした松の木片を持つて、その死骸の一つの顔を覗

きこむやうに眺めてゐた。髪の毛の長い所を見ると、多分女の死骸であらう。

下人は、六分の恐怖と四分の好奇心に動かされて、暫時は呼吸をするのさへ忘れてゐた。

舊記の記者の語を借りれば、「頭身の毛も太る」やうに感じたのである。すると、老婆は、松の木片を、床板の間に挿して、それから、今まで

眺めてゐた死骸の首に、兩手をかけると、丁度

猿の親が猿の子の虱をとるやうに、その長い髪の毛を一本づつ抜きはじめた。髪は手に従つて

抜けるらしい。

その髪の毛が、一本づつ抜けるのに従つて、

下人の心からは、恐怖が少しづつ消えて行つた。

さうして、それと同時に、この老婆に對する烈

しい憎悪が、少しづつ動いて来た。——いや、

この老婆に對すると云つては、語弊があるかも知れない。

寧ろ、あらゆる惡に對する反感が、一分毎に強さを増して來たのである。この時、誰

かがこの下人に、さつき門の下でこの男が考へ

てゐた、餓死をするか盗人になるかと云ふ問題を改めて持出したら、恐らく下人は、何の未練

もなく、餓死を選んだ事であらう。それほど、

この男の惡を憎む心は、老婆の床に挿した松

の木片のやうに、勢よく燃え上り出してゐた

のである。

下人には、勿論、何故老婆が死人の髪の毛を

抜くかわからなかつた。従つて、合理的には、

それを善惡の何れに片づけてよいかわからなかつ

た。しかし下人にとつては、この雨の夜に、こ

の羅生門の上で、死人の髪の毛を抜くと云ふ事

が、それ丈で既に許す可らざる惡であつた。勿

論下人は、さつき迄自分が、盗人になる氣であ

た事などは、とうに忘れてゐるのである。

そこで、下人は、兩足に力を入れて、いきなり、

梯子から上へ飛び上つた。さうして聖柄の

太刀に手をかけながら、大股に老婆の前へ歩み

よつた。老婆が驚いたのは云ふ迄もない。

老婆は、「目下人を見ると、まるで弩にで

も弾かれたやうに、飛び上つた。

「おのれ、どこへ行く。」

下人は、老婆が死骸に近づきながら、慌て

ふたために逃げようとする行手を塞いで、かう

罵つた。老婆は、それでも下人をつきのけて行

かうとする。下人は又、それを行かすまいとし

て、押しもどす。二人は死骸の中で、暫、無言

のまま、つかみ合つた。しかし勝敗は、はじめ

から、わかつてゐる。下人はたうとう、老婆の腕

をつかんで、無理にそこへ扭ぢ倒した。丁度、

雞の脚のやうな、骨と皮ばかりの腕である。

「何をしてゐた。云へ。云はぬと、これだぞよ。」

下人は、老婆をつき放すと、いきなり、太刀の

鞘を拂つて、白い銅の色をその眼の前へつきつ

けた。けれども、老婆は黙つてゐる。兩手をわ

なわなふるはせて、肩で息を切りながら、眼を、

眼珠が眶の外へ出さうになる程、見開いて、啞の

やうに執拗く黙つてゐる。これを見ると、下人

は始めて明白にこの老婆の生死が、全然、自分

の意志に支配されてゐると云ふ事を意識した。

さうしてこの意識は、今まではしく燃えてゐ

た憎惡の心を、何時の間にか冷ましてしまつた。

後に残つたのは、唯、或仕事をして、それが圓滿

に成就した時の、安らかな得意と満足とがある

ばかりである。そこで、下人は、老婆を見下し

ながら、少し聲を柔げてかう云つた。

「己は檢非違使の廳の役人などではない。今し

方この門の下を通りかかつた旅の者だ。だから

お前に繩をかけて、どうしようかと云ふやうな事

はない。唯、今時分、この門の上で、何をして

居たのだから、それを已に話しさへすればいいの

だ。」

すると、老婆は、見開いてゐた眼を、一層大き

くして、ちつとその下人の顔を見守つた。眶の

赤くなつた、肉食鳥のやうな、鋭い眼で見たのである。それから、鐵で、殆ど鼻と一つになつた唇を、何か物でも嚙んでゐるやうに動かし、細い喉で、尖つた喉佛の動いてゐるのが見える。その時、その喉から、鴉の啼くやうな聲が、喘ぎ喘ぎ、下人の耳へ傳はつて來た。

「この髪を抜いてな、この髪を抜いてな、髪にせうと思つたのぢや。」

下人は、老婆の答が存外、平凡なのに失望した。さうして失望すると同時に、又前の憎悪が、冷た侮蔑と一しよに、心の中へはひつて來た。すると、その氣色が、先方へも通じたのであらう。老婆は、片手に、まだ死骸の頭から奪つた長い抜け毛を持つたなり、糞のつぶやくやうな聲で、口ごもりながら、こんな事を云つた。

「成程な、死人の髪を抜くと云ふ事は、何ぼ悪い事かも知れぬ。ぢやが、ここにある死人どもは、皆その位な事を、されても悪い人間ばかりだぞよ。現在、わしが今髪を抜いた女などは、蛇を四寸ばかりづつに切つて干したのを、干魚だと云うて、太刀帯の陣へ賣りに往んだわ。疫病にかかつて死ななんだら今でも賣りに往んでゐた事である。それもよ、この女の賣る干魚は、味がよいと云うて、太刀帯どもが、缺かさず

薬料に買つてゐたさうな。わしは、この女のした事が悪いとは思つてゐぬ。せねば、餓死をするのぢやて、仕方がなくした事である。されば、今又、わしのしてゐた事も悪い事とは思はぬよ。これとてもやはりせねば、餓死するぢやて、仕方なくする事ぢやわいの。ぢやて、その仕方がない事を、よく知つてゐたこの女は、大方、わしのする事も大目に見てくれるであろ。」

老婆は、大體こんな意味の事を云つた。

下人は、太刀を鞘にをさめて、その太刀の柄を左の手でおさへながら、冷然として、この話を聞いてゐた。勿論、右の手では、赤く頬に膿を持つた大きな面皰を氣にしたがら、聞いてゐるのである。しかし、之を聞いてゐる中に、下人の心には、或勇氣が生まれて來た。それは、さつき門の下で、この男には缺けてゐた勇氣である。さうして、又さつきこの門の上へ上つて、この老婆を捕へた時の勇氣とは、全然、反對な方向に動かうとする勇氣である。下人は、餓死をするか盜人になるかに、迷はなかつたばかりではない。その時のこの男の心もちから云へば、餓死などと云ふ事は、殆ど、考へる事さへ出來ない程、意識の外に追ひ出されてゐた。

老婆の話が完ると、下人は嘲るやうな聲で念を押した。さうして、一足前へ出ると、不意に右の手を面皰から離して、老婆の襟上をつかみながら、嚙みつくやうにかう云つた。

「では、己が引剝をしようと思ひまいた。己もさうしなければ、餓死をする體なのだ。」

下人は、すばやく、老婆の著物を剥ぎとつた。それから、足にしがみつかうとする老婆を、手荒く死骸の上へ蹴倒した。梯子の口までは、僅に五歩を數へるばかりである。下人は、剥ぎとつた梅肌色の著物をわきにかかへて、またたき間に急な梯子を夜の底へかけ下りた。

暫、死んだやうに倒れてゐた老婆が、死骸の中から、その裸の體を起したのは、それから間もなくの事である。老婆は、つぶやくやうな、うめくやうな聲を立てながら、まだ燃えてゐる火の光をたよりに、梯子の口まで、這つて行つた。さうして、そこから、短い白髪を倒にして、門の下を覗きこんだ。外には、唯、黒洞洞たる夜があるばかりである。

下人の行方は、誰も知らない。

(大正四年九月作)

鼻

禪智内供の鼻と云へば、池の尾で知らない者はない。長さは五六寸あつて上唇の上から顎の下まで下つてゐる。形は元も先も同じやうに太い。云はば細長い腸詰のやうな物が、ぶらりと顔のまん中からぶら下つてゐるのである。

五十歳を越えた内供は、沙彌の昔から内道場供奉の職に陞つた今日まで、内心では始終この鼻を苦に病んで來た。勿論表面では、今でもさほど氣にならないやうな顔をしてすましてゐる。これは真念に當來の淨土を渴仰すべき僧侶の身で、鼻の心配をするのが悪いと思つたからばかりではない。それより寧ろ、自分で鼻を氣にしていると云ふ事を、人に知られるのが嫌だつたからである。内供は日常の談話の中に、鼻と云ふ語が出て來るのを何よりも恨れてゐた。

内供が鼻を持てあました理由は二つある。——一つは實際的に、鼻の長いのが不便だつたからである。第一飯を食ふ時にも獨りでは食へない。獨りで食へば、鼻の先が鍋の中の飯へと

どいてしまふ。そこで内供は弟子の一人を膳の向うへ坐らせて、飯を食ふ間中廣さ一寸長さ二尺ばかりの板で、鼻を持上げてゐて貰ふ事にした。しかしかうして飯を食ふと云ふ事は、持上げてゐる弟子にとつても、持上げられてゐる内供にとつても、決して容易な事ではない。一度この弟子の代りをした中童子が、嘔をした拍子に手がふるへて、鼻を粥の中へ落した話は、當時京都まで喧傳された。——けれどもこれは内供にとつて、決して鼻を苦に病んだ重なる理由ではない。内供は實にこの鼻によつて傷けられる自尊心の爲に苦しんだのである。

池の尾の町の者は、かう云ふ鼻をしてゐる禪智内供の爲に、内供の俗でない事を仕合せだと云つた。あの鼻では誰か妻になる女があるまいと思つたからである。中には又、あの鼻だから出家したのだらうと批評する者さへあつた。しかし内供は、自分が僧である爲に幾分でもこの鼻に煩される事が少くなつたとは思つてゐない。内供の自尊心は、妻帯と云ふやうな結果

的な事實に左右される爲には、餘りにデリケートに出来てゐたのである。そこで内供は、積極的にも消極的にも、この自尊心の毀損を恢復しようとした。

第一に内供の考へたのは、この長い鼻を實際以上に短く見せる方法である。これは人の知らない時に、鏡に向つて、いろいろな角度から顔を映しながら、熱心に工夫を凝らして見た。どうかすると、顔の位置を換へるだけでは、安心が出来なくなつて、頬杖をついたり顔の先へ指をあてがつたりして、根氣よく鏡を覗いて見る事もあつた。しかし自分でも満足する程、鼻が短く見えた事は、是までに唯の一度もない。時によると、苦心すればする程、却て長く見えるやうな氣さへした。内供は、かう云ふ時には、鏡を筥へしまひながら今更のやうに溜息をついて、不承不承に又元の經机へ觀音經をよみに歸るのである。

それから又内供は、絶えず人の鼻を氣にしてゐた。池の尾の寺は、僧供講説などの盛行はれる寺である。寺の内には、僧坊が隙なく建て續いて、湯屋では寺の僧が毎日に湯を沸かしてゐる。従つてこへ出入する僧俗の類も甚多い。内供はかう云ふ人々の顔を根氣よく物色

した。一人でも自分のやうな鼻のある人間を見つけて、安心がしたかつたからである。だから内供の眼には、紺の水干も白の帷子もはひらない。まして柑子色の帷子や推鉦の法衣などは、見慣れてゐるだけに、あれども無きが如くである。内供は人を見ずに唯、鼻を見た。——しかし鍵鼻はあつても、内供のやうな鼻は一つも見當らない。その見當らない事が度重なるに従つて、内供の心は次第に又不快になつた。内供が人と話しながら、思はずぶらりと下つてゐる鼻の先をつまんで見て、年甲斐もなく顔を赤めたのは、全くこの不快に動かされての所爲である。

最後に、内供は、内典外典の中に、自分と同じやうな鼻のある人物を見出して、せめても幾分の心やりにしようと思つた事がある。けれども、目蓮や、舍利弗の鼻が長かつたとは、どの經文にも書いてない。勿論龍樹や馬鳴も、人故の鼻を備へた菩薩である。内供は、震旦の話の序に蜀漢の劉玄德の耳が長かつたと云ふ事を聞いた時に、それが鼻だつたら、どの位自分は心細くなるだらうと思つた。

内供がかう云ふ消極的な苦心をしながらも、一方では又積極的に鼻の短くなる方法を試

みた事は、わざわざここに云ふ迄もない。内供はこの方面でも殆出来るだけの事をした。烏瓜を煎じて飲んで見た事もある、鼠の尿を鼻へなすつて見た事もある。しかし何をどうしても、鼻は依然として、五六寸の長さをぶらりと唇の上にぶら下げてゐるではないか。

所が或年の秋、内供は用を兼ねて、京へ上つた弟子の僧が、知己の醫者から長い鼻を短くする法を教はつてゐた。その醫者と云ふのは、もと僧且から渡つて來た男で、當時は長樂寺の供僧になつてゐたのである。

内供は、いつものやうに、鼻などは氣にかけないと思ふ風をして、わざとその法もすぐによつて見ようと思ふはずにゐた。さうして一方では、氣輕な口調で、食事の度毎に、弟子の手数をかけるのが、心苦しいと思ふやうな事を云つた。内心では勿論弟子の僧が、自分を説伏せて、この法を試みさせるのを待つてゐたのである。弟子の僧にも、内供のこの策略がわからぬ筈はない。しかしそれに對する反感よりは、内供のさう云ふ策略をとる心もちの方が、より強くなる。

この弟子の僧の同情を動かしたのであらう。弟子の僧は、内供の豫期通り、口を極めて、この法を試みる事を勧め出した。そして、内供自身

も亦、その豫期通り、結局この熱心な勧告に聽従する事になつた。

その法と云ふのは、唯、湯で鼻を茹でて、その鼻を人に踏ませると云ふ、極めて簡單なものであつた。

湯は寺の湯屋で、毎日沸かしてゐる。そこで弟子の僧は、指も入れられないやうな熱い湯を、すぐに提に入れた。湯屋から汲んで來た。しかしちかかにこの提へ鼻を入れるとなると、湯氣に吹かれて顔を火傷する懼がある。そこで折敷へ穴をあけて、それを提の蓋にして、その穴から鼻を湯の中へ入れる事にした。鼻だけはこの熱い湯の中へ浸しても、少しも熱くないのである。しばらくすると弟子の僧が云つた。

——もう茹つた時分でござらう。

内供は苦笑した。これだけ聞いたのでは、誰しも鼻の話とは氣がつかないだらうと思つたからである。鼻は熱湯に蒸されて、蛋の食つたやうにむづ痒い。

弟子の僧は、内供が折敷の穴から鼻をぬくと、そのまだ湯氣の立つてゐる鼻を、兩足に力を入れたが、踏みはじめた。内供は横になつて、鼻を床板の上へのばしながら、弟子の僧の足が上下に動くのを眼の前に見てゐるのである。弟

子の僧は、時々氣の毒さうな顔をして、内供の禿げ頭を見下しながら、こんな事を云つた。

——痛うはござらぬかな。醫師は責めて踏めと申したで。ちやが、痛うはござらぬかな。

内供は、首を振つて、痛くないと云ふ意味を示さうとした。所が鼻を踏まれてゐるので思ふやうに首が動かない。そこで、上眼を使つて、弟子の僧の足に、靴のきれてゐるのを眺めながら、腹を立てたやうな聲で、

——痛うはないで。

と答へた。實際鼻はむづ痒い所を踏まれるので、痛いよりも却て氣もちのいい位だつたのである。

しばらく踏んでゐると、やがて、粟粒のやうなもの、鼻へ出来はじめた。云はば毛をむしつた小鳥をそつくり丸彘にしたやうな形である。弟子の僧は之を見ると、足を止めて獨り言のやうにかう云つた。

——之を鑪子でぬけと申す事でござつた。

内供は、不足らしく頬をふくらせて、黙つて弟子の僧のするなりに任せて置いた。勿論弟子の僧の親切がわからない譯ではない。それは分つても、自分の鼻をまるで物品のやうに取扱ふのが、不愉快に思はれたからである。内供は、

信用しない醫者の手術をうける患者のやうな顔をして、不承不承に弟子の僧が、鼻の毛穴から鑪子で脂をとるのを眺めてゐた。脂は、鳥の羽の莖のやうな形をして、四分ばかりの長さにぬけるのである。

やがて之が一通りすむと、弟子の僧は、ほつと息ついたやうな顔をして、

——もう一度、之を茹でればようござる。

と云つた。

内供は矢張、八の字をよせたまま不服らしい顔をして、弟子の僧の云ふなりになつてゐた。さて二度目に茹でた鼻を出して見ると、成程、何時になく短くなつてゐる。これではあたりまへの鑪鼻と大した變りはない。内供はその短くなつた鼻を撫でながら、弟子の僧の出してくる鏡を、極りが惡るさうにおづおづ覗いて見た。

鼻は——あの顎の下まで下つてゐた鼻は、殆ど諺のやうに萎縮して、今は僅に上唇の上で意氣地なく残喘を保つてゐる。所所まだらに赤くなつてゐるのは、恐らく踏まれた時の痕であらう。かうなれば、もう誰も晒すものはないのにちがひない。——鏡の中にある内供の顔は、顔の外にある内供の顔を見て、満足さう

に眼をしはたいた。

しかし、その日はまだ一日、鼻が又長くなりはないかと云ふ不安があつた。そこで内供は通經する時にも、食事をする時にも、暇さへあれば手を出して、そつと鼻の先にさはつて見た。が、鼻は行儀よく唇の上に納まつてゐるだけで、格別それより下へぶら下つて來る氣色もない。それから一晩寝てあくる日早く眼がさめると内供は先、第一に、自分の鼻を撫でて見た。鼻は依然として短い。内供はそこで、幾年にもなく、法華經書寫の功を積んだ時のやうな、のびのびした氣分になつた。

所が二三日たつ中に、内供は意外な事實を發見した。それは折から、用事があつて、池の尾の寺を訪れた侍が、前よりも一層可笑しさうな顔をして、話も碌碌せずに、じろじろ内供の鼻ばかり眺めてゐた事である。そののみならず、嘗て、内供の鼻を粥の中へ落した事のある中童子などは、講堂の外で内供と行きちがつた時に、始めは、下を向いて可笑しさをこらへてゐたが、とうとうこらへ兼ねたと見えて、一度にふつと吹き出してしまつた。用を云ひつかつた下法師、ちが、面と向つてゐる間だけは、憤んで聞いてゐても、内供が後さへ向けば、すぐ

にくすくす笑ひ出したのは、一度や二度の事ではない。

内供は、始、之を自分の顔がはりがしたせゐだと解釋した。しかしどうもこの解釋だけでは十分に説明がつかないやうである。——勿論、中童子や下法師が嘔ふ原因は、そこにあるのにちがひない。けれども同じ嘔ふにしても、鼻の長かつた昔とは、嘔ふのにとことなく容子がちがふ。見慣れた長い鼻より、見慣れない短い鼻の旁が滑稽に見えると云へば、それまでである。が、そこにはまだ何かあるらしい。

——前にはあのやうにつつけとは嘔はなんだて。

内供は、誦しかけた經文をやめて、禿け頭を傾けながら、時々かう呟く事があつた。愛すべき内供は、さう云ふ時になると、必ぼんやり、傍にかけた普賢の畫像を眺めながら、鼻の長かつた四五日前の事を憶ひ出して、「今はむけにいやしなくなりさされる人の、さかえたる昔をしのぶがごとくふさぎこんでしまふのである。

内供には、遺憾ながらこの間に答を與へる明が缺けてゐた。

——人間の心には互に矛盾した二つの感情がある。勿論、誰でも他人の不幸に同情しな

い者はない。所がその人がその不幸を、どうにかして切りぬける事が出来ると、今度はこつちで何となく物足りないやうな心もちがする。少し誇張して云へば、もう一度その人を同じ不幸に陥れて見たいやうな氣にさへなる。さうして何時の間にか、消極的ではあるが、或敵意をその人に對して抱くやうな事になる。——内供が、理由を知らないながらも、何となく不快に思つたのは、池の尾の僧俗の態度に、この傍觀者の利己主義をそれとなく感づいたからに外ならない。

そこで内供は日毎に機嫌が悪くなつた。二言目には、誰でも意地悪く叱りつける。しまひには鼻の療治をしたあの弟子の僧でさへ、「内供は法僧食の罪を受けられるぞ」と陰口をきく程になつた。殊に内供を忿らせたのは、例の惡戯な中童子である。或日、けたたましく犬の吠える聲がするので、内供が何氣なく外へ出て見ると、中童子は、二尺ばかりの木片をふりまはして、毛の長い、瘦せた犬を逐ひまはしてゐる。それも唯、逐ひまはしてゐるのではない。「鼻を打たれまい。それ、鼻を打たれまい」と囁しながら逐ひまはしてゐるのである。内供は、中童子の手からその木の片をひたつて、したたかさ

の顔を打つた。木の片は以前の鼻持ち上げの木だったのである。

内供はなまじひに、鼻の短くなつたのが、反て恨めしくなつた。

すると或夜の事である。日が暮れてから急に風が出たと見えて、塔の風鐸の鳴る音が、うるさい程枕に通つて來た。その上、寒さもめつきり加はつたので、老年の内供は寢つかうとしても寢つかれない。そこで床の中でまじまじしてゐると、ふと鼻が何時になく、むづ痒いのに氣がついた。手をあてて見ると少し水氣が來たやうにむくんでゐる。どうやらそこだけ、熱さへもあるらしい。

——無理に知うしたで、病が起つたのかも知れぬ。

内供は、佛前に香花を供へるやうな恭しい手つきで、鼻を抑へながら、かう呟いた。

翌朝、内供が何時ものやうに早く眼をさまして見ると、寺内の銀杏や櫟が一晩の中に葉を落したので、庭は黄金を敷いたやうに明い。塔の屋根には霜が下りてゐるせむであらう。まだうすい朝日に、九輪がまばゆく光つてゐる。禪智内供は、薔を上げた縁に立つて、深く息をすひこんだ。

始、忘れようとしてゐた或感覚が、再、内供に歸つて来たのは、この時である。

内供は慌てて鼻へ手をやつた。手にさはるものは、昨夜の短い鼻ではない。上唇の上から顎の下まで、五六寸あまりもぶら下つてゐる、昔の長い鼻である。内供は鼻が一夜の中に、又元の通り長くなつたのを知つた。さうしてそれと同時に、鼻が短くなつた時と同じやうな、はればれた心もちが、どこからともなく歸つて来るのを感じた。

——かうなれば、もう誰も嘲ふものはないにちがひない。

内供は心の中でかう自分に囁いた。長い鼻をあげた秋風にぶらつかせながら。

(大正五年一月作)

ユダ

笑は量的に分てば微笑、哄笑の二種あり。質的に分てば嘲笑、嘲笑、苦笑の三種あり。……予が最も愛する笑は嘲笑、嘲笑、苦笑と兼ねたる、爆発の如き哄笑なり。アウエルバウの穴蔵に愚昧の學生を奔りせたる、メフィストフレエスの哄笑なり——カアル・エミリウス——

途越と云へる「種入れぬ麵包の祭」近づけり。祭司の長學者たち、如何にしてかイエスを殺さんと窺ふ。但民を畏れたり。猶惡魔十二の中のイスカリオテと稱ふるユダに憑きぬ。ユダ橄欖の林を歩める時、惡魔彼に云ひけるは、「イエスを祭司の長たちに賣せ。然すれば三十枚の銀子を得べし。」されどユダ耳を蔽ひ、林の外に走り去れり。後又イエスサレムの町をさまよへる時、惡魔彼に云ひけるは、「イエスを祭司の長たちに賣せ。然らずば爾もイエスと共に、必十字架に釘けらるべし。」されどユダ耳を蔽ひ、イエスのもとに走り去れり。イエス彼に云ひけるは、「ユダよ。我誠に爾を知る。爾は荒野の獅子よりも強し。但小羊の心を忘るる勿れ。」ユダ、イエスの言葉を悦べり。されどその意味を覺らざりき。

途越の祭來りし時、イエス弟子と共に食に就けり。惡魔三度ユダに云ひけるは、「イエスを祭司の長たちに賣せ。然すれば爾の名、イエスの名と共に傳はらん。イエスの名太陽よりも光あれば、爾の名黑暗よりも恐怖あらん。爾は天國の奴隸たらざるも、必地獄の王たるべし。バビロンの淫婦は爾の妃、七頭の毒蛇は爾の馬、火と煙と硫黄とは汝が黒檀の寶座の前に、不斷の香煙を上らしめん。ユダこの聲を聞きし時、目のあたり地獄の莊嚴を見たり。イエス忽ちユダに一撮の食物を與へ、靜かに彼に云ひけるは、「爾が爲さんとする事は速に爲せ。」ユダ一撮の食物を受け、直ちに出席たり。時既に夜なりき。ユダ祭司の長カヤバの前に至り、イエスを彼に賣さんと云へり。カヤバ駭きて云ひけるは、「爾は何者なるか、イエスの弟子か、はたイエスの師か。」そはユダの姿、額は嵐の空よりも黒み、眼は焰よりも輝きつつ、王者の如く振舞ひしが故なり。

(『點心』(Los Caprichos) 40)

父

自分が中學の四年生だつた時の話である。

その年の秋、日光から足尾へかけて、三泊の修學旅行があつた。「午前六時三十分上野停車場前集合、同五十分發車……」かう云ふ箇條が、學校から渡す謄寫版の刷物に書いてある。

當日になると自分は、碌に朝食も食はずに家を出た。電車では、停車場まで二十分

とはかからない。——さう思ひながらも、何となく心がせく。停留場の赤い柱の前に立つて、電車を待つてゐるうち、気が氣でない。

生憎、空は曇つてゐる。方方の工場で鳴らす汽笛の音が、鼠色の水蒸氣をふるはせたら、

それが皆霧雨になつて、降つて來はしないかと思はれる。その退屈な空の下で、高架鐵道を汽車が通る。被服廠へ通ふ荷馬車が通る。店の戸

が一つづつ開く。自分のゐる停留場にも、もう二三人、人が立つた。それが皆眠の足りなさう

な顔を、陰氣らしく片づけてゐる。寒い。——そこへ對引の電車が來た。

こみ合つてゐる中を、やつと吊皮にぶらさが

ると、誰か後から、自分の肩をたたく者があ

る。自分は慌ててふり向いた。

「お早う。」

見ると、能勢五十雄であつた。矢張、自分のやうに、組のヘルの制服を着て、外套を巻いて左の肩からかけて、麻のゲートルをはいて、腰に辨當の包やら水筒やらをぶらさげてゐる。

能勢は、自分と同じ小學校を出て、同じ中學校へはひつた男である。これと云つて、得意な

學科もなかつたが、その代りに、これと云つて、不得意なものもない。その癖、ちよいとした事

には、器用な性質で、流行唄と云ふやうなものは、一度聞くと、すぐに節を覚えて了ふ。さう

して、修學旅行で宿屋へでも泊る晩などには、それを得意になつて披露する。詩吟、陸軍提督、落語、談話、聲色、手品、何でも出來た。その

上又、身ぶりとか、顔つきとかで、人を笑はせるのに獨特な妙を得てゐる。従つて級の氣うける

も、教員間の評判も、悪くはない。尤も自分とは、互に往來はしてゐながら、さして親しい

と云ふ間柄でもなかつた。

「早いね、君も。」

「僕は何時も早いさ。」能勢はかう云ひながら、

ちよいと小鼻をうごめかした。

「でもこの間は遅刻したぜ。」

「この間？」

「國語の時間にさ。」

「ああ、馬場に叱られた時か。あいつは弘法にも筆のあやまりさ。」能勢は、教員の名前をよび

すに作る癖があつた。

「あの先生には、僕も叱られた。」

「遅刻で？」

「いいえ、本を忘れて。」

「仁丹は、いやにやかましいからな。」「仁丹」と云ふのは、能勢が馬場改論につけた譯名であ

る。——こんな話をしてゐる中に、停車場前へ來た。

乗つた時と同じやうに、こみあつてゐる中をやつと電車から下りて停車場へはひると、時刻

が早いので、まだ級の連中は二三人しか集つてゐない。互に「お早う」の挨拶を交換する。先

を争つて、待合室の木のベンチに、腰をかける。それから、何時ものやうに、勢よく饅舌

を出した。皆僕と云ふ代りに、「己」と云ふの

を得意にする年輩である。その自ら「己」と稱する連中の口から、旅行の豫想、生徒同志の品、教員の悪評などが盛に出た。

「泉はちやうど、あいつは教員のチョイスを持つてゐるもんだから、一度も下讀みなんぞした事はないんだとさ。」

「平野はもつとちやうど、あいつは試験の時と云ふと、歴史の年代をみんな爪へ書いて行くんだつて。」

「さう云へば先生だつてちやうど、いからな。」

「ちやうどいとも。本間なんぞは recorder のいとと、どつちが先へ来るんだか、それさへ確に知らない癖に、教師用でいい加減にごま化しごま化し、教へてゐるぢやあないか。」

どこまでも、ちやうど、いでも持ちさるばかりで一つも、確な事は出ない。すると、その中に能勢が、自分の隣のベンチに腰をかけて、新聞を讀んでゐた、職人らしい男の靴を、バッキンレイだと批評した。これは當時、マッキンレイと云ふ新形の靴が流行つたのに、この男の靴は、一體に光澤を失つて、その上先の方がばつくり口を開いてゐたからである。

「バッキンレイはよかつた。」かう云つて、皆一時に、失笑した。

それから、自分たちは、いい氣になつて、この待合室に出入するいろいろな人間を物色しはじめた。さうして一一、それに、東京の中學生でなければ云へないやうな、生意氣な悪口を加へ出した。さう云ふ事にかけて、ひけをとるやうな、おとなしい生徒は、自分たちの中に一人もゐない。中でも能勢の形容が、一番辛辣で、且一番話詰りに富んでゐた。

「能勢、能勢、あのお上さんを見るよ。」

「あいつは河豚が孕んだやうな顔をしてゐるぜ。」

「こつちの赤帽も、何かに似てゐるぜ。ねえ能勢。」

「あいつはカロロ五世さ。」

しまひには、能勢が一人で、悪口を云ふ役目をひきうけるやうな事になつた。

すると、その時、自分たちの一人は、時間表の前に立つて、細い数字をしらべてゐる妙な男を発見した。その男は羊羹色の背廣を着て、體操に使ふ球竿のやうな細い脚を、鼠の粗い結のズボンに通してゐる。縁の廣い昔風の黒い中折の下から、半白の毛がはみ出してゐる所を見ると、もう可成な年配らしい。その髯のまはりには、白と黒と格子縞の派手なハンケチをま

きつけて、鞭かと思ふやうな、寒竹の長い杖をちよいと脇の下へはきんでゐる。服装と云ひ、態度と云ひ、すべてが、ボンチの描縞を切抜いて、そのままそれを、この停車場の人ごみの中へ、立たせたとしか思はれない。——自分たちの一人は、又新しい悪口の材料が出来たのをよろこぶやうに、肩でをかきさつに笑ひながら、能勢の手をひつばつて、

「おい、あいつはどうだい。」とかう云つた。

そこで、自分たちは、皆その妙な男を見た。

男は少し反り身になりながら、チョツキのポケットから、紫の打紐のついた大きなニツケルの懐中時計を出して、丹念にそれと時間表の数字とを見くらべてゐる。横顔だけ見て、自分はずぐに、それが能勢の父親だと云ふ事を知つた。

しかし、そこにゐた自分たちの連中には、一人もそれを知つてゐる者がない。だから皆、能勢の口から、この滑稽な人物を、適當に形容する語を聞かうとして、聞いた後の笑ひを用意しながら、面白うに能勢の顔をながめてゐた。中學の四年生には、その時の能勢の心もちを推測する明がない。自分は危く「あれは能勢の父だぜ。」と云はうとした。